

高崎市文化財調査報告書 第370集

しものじょう いせき ぐん
下之城遺跡群

1

2016

群馬県高崎市教育委員会

序

高崎市は都市機能の充実と補完のために、倉賀野町にある操車場跡地に新都心「高崎ビジネスパーク」を建設することを計画しており、現在土地や道路の整備を進めております。

その一環として高崎市教育委員会文化財保護課では、平成 22 年度より高前幹線の道路用地と共に、下之城町・倉賀野町区内において区画道路予定地の発掘調査を行ってまいりました。

この道路建設予定地には平安時代の水田跡が多く存在し、他にも古代から近世に至る、各時代の遺跡の存在が知られております。私たちが昨年度までの 4 年間に行ってきた発掘調査では、数多くの成果を上げることができました。

今回は、下之城町の高前幹線建設予定地で国道 17 号線より北側の部分と、その周辺に展開する区画道路の発掘調査報告を行いたいと思います。

発掘調査報告書を教育資料として広く活用していただき、高崎市の歴史を築き上げてきた、祖先の暮らしの様子に想いを馳せていただければと祈念しております。

最後になりましたが、発掘調査や本書作成に際し、ご指導・ご協力いただきました関係諸機関の方々に厚く感謝を申し上げ、序といたします。

平成 28 年 3 月

高崎市教育委員会
教育長 飯野 真幸

例 言

- 1 本書は高崎都市計画事業高崎操車場跡地周辺土地地区画整理事業に伴い発掘調査された下之城遺跡群（1～4次調査のうち国道17号線より北の部分）の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の所在地
下之城遺跡群 群馬県高崎市下之城町 173- 3・250・258- 3・259- 2・265- 1・265- 2・285- 2・285- 4・293- 1を中心とする地点。
- 3 事業主体者 高崎市（高崎市都市整備部 市街地整備課）
- 4 発掘調査体制
教育長 飯野眞幸
教育部長 上原正男
文化財保護課長 若狭徹
文化財保護課埋蔵文化財係長 角田真也 庶務担当 針井修 加藤志津代
調査担当 黒田晃 明石雅夫 飯塚光生
- 5 本書の編集は黒田晃が行い、各遺跡の内容に関しては調査担当が執筆した。
- 6 遺構測量は直営のほか㈱測研に委託して行った。遺構の写真撮影は担当者が行った。
- 7 出土遺物の写真撮影は直営で行った。
- 8 担当者が遺跡で測量した遺構図のデジタルトレースは直営で実施した。遺物の実測・トレースは直営で行ったものと㈱測研に委託したものがある。
- 9 調査で得られた各種原図や写真・出土品は高崎市教育委員会で管理保管している。

凡 例

- 1 挿図中の方位は座標北を示し、座標は世界測地系を用いている。
- 2 遺構図については、各挿図中にスケールを添付したが、原則下記の縮尺で掲載した。
水田・遺物集中地点 1/100・1/40・1/20
- 3 遺物図については、挿図中にスケールを添付したが、原則下記の縮尺で掲載した。
土器・石器 1/4
- 4 火山噴出物にかかわる表記・略号は以下の通りである。
As-A（浅間A軽石：1783年（天明三年））
As-B（浅間B軽石：1108年（嘉承三年・天仁元年））
As-C（浅間C軽石：3世紀末～4世紀初頭）

目 次

序
例 言
凡 例
目 次
挿図目次

下之城遺跡群

第1章 調査の方法と経緯

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法	2

第2章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	2
第3節 周辺の遺跡	4

第3章 検出された遺構

第1節 概要	9
第2節 各時代の遺構・遺物	11

挿 図 目 次

第1図 今回報告の調査区及び周辺の遺跡	7
第2図 平成22年度～25年度調査区 (S=1/1200)	8
第3図 平成22・23年度 As-B 下水田平面図 (S=1/500)	12
第4図 平成23年度 SX01 (S=1/40)	13
第5図 平成23年度 SX01 出土遺物① (S=1/4)	14
第6図 平成23年度 SX01 出土遺物② (S=1/4)	15
第7図 平成23年度 SX01 出土遺物③ (S=1/4)	16
第8図 平成23年度 SX01 出土遺物④ (S=1/4)	17
第9図 平成25年度 SX01 (S=1/20)	21
第10図 平成25年度 SX01 出土遺物 (S=1/4)	22

第 1 章 調査の方法と経緯

第 1 節 調査に至る経緯

高崎市は平成 5 年の「地方拠点法」に基づき前橋・高崎地方拠点都市地域の地域指定を受け、平成 9 年に高崎操車場跡地周辺を含む 75.3 ヘクタールについて土地区画整理事業が認可された。翌平成 10 年 3 月には高崎操車場跡地 14.8 ヘクタールを清算事業団より取得し、現在都市基盤の整備に取り組んでいる。

文化財保護課では、平成 22 年以降継続して区画道路及び高前幹線建設に伴う発掘調査を行っており、古墳時代から近世江戸時代に至る多くの遺跡を検出することができた。

今回はこれらの中から、国道 17 号線より北に立地する区画道路及び高前幹線建設予定地の発掘成果を報告したいと思う。

第 2 節 調査の方法

今回は住宅地に隣接する畑地を主たる調査地としており、遺跡の周囲に広大な廃土置き場を確保することが困難であった。従って重機による表土掘削は調査地全域を一時に掘るのではなく、調査区の一部を土置き場として確保し、調査終了後に土置き場として利用していた区域を再度掘削するいわゆる反転が必要であった。

また、表土掘削の際の重機の作業や調査中に生じた深い穴や溝など一般の方や近隣の児童が調査区内に入ると危険な場合が多いので、まずは十分な安全対策をとる必要があった。

重機を用いて表土を約 50 ～ 60 cm 掘削したところ、1108 年(天仁元年)に浅間山が噴火した際降下した火山灰(以下 As-B と表記)が厚いところで 10 cm 前後堆積していたため、この層で重機による掘削を止め、人力により As-B 下の遺構確認を行った。

これらの遺構の断面図・平面図は市職員・作業員が測量した他、一部(株)測研に委託して測量を行い、担当者が遺跡全体及び個別遺構の写真撮影を行って記録保存を完了させた。

調査終了後は再び重機を用いて廃土を移動し埋め戻しを行った。現在出土した遺物、作成した図面・写真等は高崎市教育委員会が保管・管理している。

第 2 章 地理的歴史的環境

第 1 節 地理的環境

遺跡は高崎市下之城町に位置する。榛名山東南麓を水源とする小河川によって形成された相馬ヶ原扇状地が遺跡周辺にも展開しているが、遺跡地はその扇端部付近に立地する。

周辺では榛名水源の小河川が北西から南東方向に流れており、地形そのものも南東へ向かって緩やかに傾斜している。

利根川によって形成された前橋台地上には井野川が流れており、この流域に形成されている低地(井野川低地帯)を境として、その東側を高崎台地と呼称する場合が多い。

この高崎台地上には、基盤となる前橋泥流の上に高崎泥流と呼ばれる泥流層が堆積している。更にその上には 6 世紀代に榛名山二ツ岳の噴火した際に形成された井野川泥流が堆積している。従って、当該地区は表土を掘削し、遺構検出面の土壌を除去すると、比較的浅い深度で関東ローム層ではなく、泥流層のシルトが検出されることが特徴となっている。

また、地下水位が高く、As-B 下水田面から若干掘り下げると湧水が確認されることも特徴の一つである。

第2節 歴史的環境

周辺では縄文時代から近世に至るまで多くの遺跡が検出されている。遺跡の北には平成19年度から22年度に至るまで高前幹線建設予定地の発掘調査が実施されており、天仁元年(1108年)のに浅間山が噴火した際に降下した火山灰浅間B軽石(As-B)で埋没・放棄された水田の畦・水路などが主体として検出された。以下、時代ごとに周辺の歴史的環境を概観していきたい。

旧石器・縄文時代

遺跡周辺では前橋泥流が分厚く堆積しているため、旧石器の遺構・遺物は検出されていない。また、縄文時代も遺物の出土は確認されるが、遺構の数は極めて少ない。

上中居遺跡群では縄文中期後半を中心とする集石遺構・土坑・被熱痕跡と共に当該期の土器群が検出されており、遺構との時期関係は明らかではないが、土偶や石棒等が出土している。また下中居条里遺跡では、縄文中期後半の竪穴住居跡及び土坑が検出されている。数は少ないが縄文中期以降の集落も、遺跡周辺には存在していたのである。

弥生時代

遺跡の西側では竜見町遺跡・高崎競馬城遺跡など弥生中期に属する遺跡が多く存在するが、遺跡周辺においては下中居条里遺跡において弥生後期後葉の時期の集落が検出されているのみで中期以前の遺構・遺物共に検出されていない。今回報告する調査区内からも弥生土器の出土は見られなかった。

古墳時代

古墳時代に入ると、井野川左岸から烏川合流点にかけての微高地上に集落が広がっており、井野川左岸・烏川左岸流域には多くの古墳が集中して築造されている。また井野川沿いの微高地東側から利根川右岸にかけて展開する後背湿地には、古墳前期にまで遡る水田が営まれていたことが最近の発掘調査から判明している。

古墳時代前期の遺構としては、中居町一丁目遺跡・上中居遺跡群・宿大類村西遺跡・上大類北宅地遺跡などからは集落と方形周溝墓群が、下中居条里遺跡・上中居辻薬師Ⅲ遺跡では集落が、上中居辻薬師Ⅱ遺跡・柴崎遺跡群では方形周溝墓が検出されている。

これらの中では上中居遺跡群の住居から南関東系の壺が、中居町一丁目遺跡・上中居遺跡群・寺尾町下遺跡では布留式土器が出土しており、これら井野川下流域地域には外来系の土器の影響が濃厚であったことが知られている。

古墳時代後期になると柴崎遺跡群・高関村前遺跡・高関村前Ⅱ遺跡・高関東沖-村前遺跡・上中居辻薬師Ⅱ遺跡・上中居遺跡群などで集落が確認されており、集落遺跡の増加が見られる。

更に遺跡の西に存在する東町Ⅲ遺跡からは、古墳時代前期の浅間C軽石(As-C)で埋没した水田跡とFA・FPを含む洪水層下の水田が検出されており、高関東沖-村前遺跡からは古墳時代後期の畠跡が検出されている。

奈良・平安時代

奈良・平安時代には条里制の導入や灌漑技術の発展に伴って、大規模な水田開発が行われた。これらの水田は天仁元年(1108年)の浅間山噴火に伴う火山灰(As-B)によって壊滅的な被害を受けたが、その後復旧を行わず放置された水田が多かったため、高崎市内においては現在も残存するAs-B軽石の下から、およそ900年前の水田面を数多く検出することができるのである。

遺跡の周辺を見ると、高関村前Ⅱ遺跡・高関北沖遺跡・下中居条里遺跡・栄町Ⅰ～Ⅲ遺跡・東町Ⅰ～Ⅳ遺跡などで水田遺構が検出されており、更に水田周囲の微高地からは高関村前遺跡・下中居条里遺跡などで当該期の集落が検出されている。

また、東町Ⅳ遺跡及び旭町Ⅰ遺跡・真町Ⅰ遺跡からは8・9世紀の洪水層下より水田跡が検出されている。こ

のように奈良・平安時代の高崎市域に住む住民は、火山噴火とそれに伴う洪水との戦いの歴史であったことが伺える。

中世

遺跡周辺は中世和田氏の領域に含まれており、和田氏に関連する一族の環濠屋敷が地獄堰・矢中堰に沿うように造営されている。

高崎市の中心にある高崎城も、もとは烏川左岸段丘上に構えられた和田氏の居城を利用して井伊直政が慶長三年(1598年)に築城したものであり、上中居町の反町城は和田氏家臣であったと推定される反町大膳幸定の居城であった。中居の砦は新堀の砦とも呼ばれ、和田氏関連の砦とされているが、詳細は不明である。更に上中居町宇名室の総鎮守諏訪神社とその周辺は、かつて堀に囲まれた区画が存在した。現在は堀も残っていないが、諏訪神社が環濠遺構の中心に位置する。

さて遺跡の南側で現在の国道17号線の南に近接する下之城は、永禄十一年(1568年)に和田業繁(吉景)が和田城の支城として築いたもので、業繁の弟正盛が城主となっているが、和田氏による築城以前から存在していたという説もある。和田正守は武田信玄に仕えたが、天正三年(1575年)の長篠の戦いで討死したという説と、浪人後に上杉景勝に仕えたともいわれている。天正十八年(1590年)に後北条氏が滅亡し、関東に徳川家康が入ったが、下之城に家康の家臣が入城した形跡が無いことから、この頃廃城となったとされている。

平成26年度及び27年度の高前幹線建設に伴う発掘調査では、今回報告される22年度調査区の南に接して、下之城東端の堀および土塁が確認されている。

第3節 周辺の遺跡

今回報告するのは、市内下之城地区において平成23・24年度に行われた高前幹線建設予定地の発掘調査と、平成25年度に行われた区画道路予定地の発掘調査である。

遺跡の周辺を見わたしてみると、平成22年度以前に今回の報告地点の北に接する下中居・上中居地区において高前幹線建設予定地の発掘調査が行われており、南北方向に。巨大なトレンチを入れたような状態になっている。したがって、これらの成果を見ていくことにより、この地域における遺跡の分布状態や土地の活用の仕方などを大局的に把握することが可能である。(第1図参照)

ここでは周辺遺跡の調査例として、過年度に実施された高前幹線建設に伴う発掘調査の成果を確認していきたい。

19年度調査区は、今回報告される平成24年度調査区の北に接しており、南北方向に延びる高前幹線道路用地を広い面積で南から1区・2区に区画し、更に北に接する小区画の3区と現有道路の東に存在する4区、及び更に北で平成20年度調査区の北に接する5区に区画されている。

24年度調査区に接する1区及び2区では現地表面より下約1mから浅間B軽石堆積層(以下As-Bと表記する)が5cmの厚みで残存しており、調査区内をほぼ東西・南北方向に区画する畦が検出された。

検出された畦は高さが1cmに満たないものばかりで、やや高まりを示す程度であったが、ほぼ座標北と一致する角度で造られた南北方向の畦が3条、それに直行する東西方向の畦が10条検出された。

2区で検出された畦は、南北方向の畦の間隔が7～10mあり、中央やや南寄りに東西方向の浅い溝を伴っている。これに対し、1区南側で検出された東西方向の畦の間隔は4～5mで、東西方向に長い長方形を呈しており、畦に囲まれた水田単位の面積を見ると、2区のものより小さい。

3区ではAs-Bが既に削平を受けており、水田を検出することができなかった、合わせて東に存在する4区でもAs-Bは検出されておらず、覆土中に浅間A軽石(以下As-Aと表記する)の純層やAs-A痕土を有する3条の溝が検出されたことから、下中居新井屋敷の一部が検出された可能性が考えられる。従って、3区のAs-Bも中・近世における館の造成によって削平されたことも考えられるであろう。

5区ではAs-Bの堆積は認められず、土坑3基・溝3条・井戸8基が検出された。下中居新井屋敷の一部であると推定されるが、井戸が多く検出されていることから、屋敷の一角が検出された可能性もある。しかし掘立柱建物は検出されなかった。

溝の覆土にはAs-Aを含んでいるものがあり、近世以降に埋没した遺構であるが、井戸のうち2基はこれら溝と重複関係にあり、井戸の方が古い。いずれの遺構も遺物が出土していないのが残念である。

20年度調査では、19年度調査区の最北端である5区(19年度)の南に接して5区(20年度)があり、さらに南へ2・7・6・1区が存在する。ちなみ1区は19年度3区の現有道路を挟んだ東側に位置し、若干距離は離れているが19年度4区の北に位置する。。更に19年度3区南側と19年度2区北側の間には、小規模な調査区の8区が存在しており、1～8区の8分割の調査区となっている。

1区は先述の通り19年度3区の東・4区の北に位置しているため、19年度3・4区同様As-Bの検出は無かった。また4区で検出された、3条の溝と連続すると推定されるやや大型の溝が検出された(SD1)。SD1は幅が3～3.5m・深さは1.8m前後を計測し、断面は逆台形で規格が整った平面形状を呈している。このSD1に斜めに重複する溝としてSD2・3・4・8・9の5条の溝が存在しており、いずれも新旧関係は明らかではないが、すべての溝がSD1と交差した先に続いていないため、同時期に存在した溝群であった可能性も否定できない。しかし、これらは皆SD1と比較すると小規模な溝であり、断面を見てもSD8が箱状に四角く掘られている他は規格的な掘り方はなされていない。

これら溝の他にSD10が調査区南端部分でSD1と重複しており、SD10の方が新しい。SD10の底は平坦で規格的な断面形状を呈しているが、遺物等が出土していないため掘削・廃絶時期の特定はできない。しかし断面の上層部(表土に近い部分)に、As-Aを含む層の存在が確認されている。つまりSD10は、検出された溝の中では比較的新しいと考えられているが、As-A降下以前に廃絶した溝であることが予想される。従って、SD1～9の掘削・廃

絶時期は、近世あるいはそれ以前の可能性が考えられるのである。

他の遺構として井戸が5基検出されている。これらの井戸は溝と同様遺物が出土していないため時期の特定ができないが、SD 1・SD 4と重複関係にあるものがあり、いずれも井戸の方が新しい。その他土坑等が検出されたが、建物を想定できるような掘立柱は検出できなかった。

1区の北には小規模な7区と現有道路の東側に6区が存在する。

6区・7区からは両方の区を東西に繋ぐ溝が存在し、覆土に下位にAs-Aが見られることから近世の溝であろう。更に7区からもう1条の溝と1基の井戸・4基の土坑が検出されている。他の遺構は遺物がなく、時期は不明である。

2区は7区の北に接しており南北に細長い調査区で、東側には同じく20年度の5区が存在する。また19年度の5区の南に位置する。ここでは2区・5区を合わせてみていきたい。

2区では3条の溝・2基の井戸・13基の土坑が検出され、5区では7条の溝・5基の井戸・25基の土坑が検出された。

2区の溝のうち1条は土師器・須恵器を伴う古代の遺構であるが、その他の遺構は井戸・土坑含めて時期が明らかでない。

5区の溝も遺物が出土しておらず、平面形状・断面形状に規格がないため中・近世城館の区画堀として認識することはできない。この区で注目されるのは円形の土坑で、多くの土坑の底に桶が据えられていた。人骨は検出できなかったが、近世の墓墳であろうか。また、井戸の中には側面を四角く木を組んで造られたものがあった。いずれも年代を確定する遺物の出土はない。

3区は19年度5区の北に位置し3条の溝が検出された。3条のうち2条は大型で、3区調査区を東西方向に横断する形で存在する。(SD11・16)これらの溝を南北に結ぶような形でやや小型の溝SD12が存在し、覆土上層にAs-Aを含んでいる。重複関係を見ると大型のSD11・SD16の方が新しい。

3区の北には4区が存在する。4区は平成20年度調査区の北端に位置する。

溝7条・土坑5基を検出したが、井戸は見られない。これら溝のうちSD27は幅1.8m～2.6m、深さは0.83mを計測し覆土の一部にAs-Aを含んでいる。遺物は出土していない。

平成19年度及び20年度に行われた高前幹線建設に伴う発掘調査の詳細は、『下中居天神裏遺跡第1・2次調査』高崎市文化財調査報告書第296集 2012を参照されたい。

平成21年度及び22年度においては、高前幹線が現有のいわゆる競馬場通りと直行する地点より南側の地点の調査が行われた。20年度に調査された4区の北に当たる。この地域では、平成19・20年度に調査された高前幹線予定地の南側の調査区とはかなり異なった様相が見られる。

まず、平成21年度に調査された前1-2-1区(『上中居前屋敷遺跡』—高前幹線事業に伴う発掘調査—高崎市文化財調査報告書第327集 2014における記載。以下これに従う。)では縄文土器を伴う2号土坑が検出されているが、これは加曾利E 3式の土器を大量に出土する中期の遺構である。遺跡周辺では当該期の遺構は数少なく、下中居Ⅲ遺跡から縄文中期後半の竪穴住居跡が1軒と土坑5基が確認されているくらいである。弥生時代の遺構は検出されていないが、溝・井戸などから後期埴式土器が出土しているため、調査区外の周辺地域に弥生後期集落が存在する可能性が高い。

古墳時代の遺構としては、22年度前1-1-1区・前1-1-2区で検出された溝2条(SD 3・SD 7が古墳時代前期の壺・S字口縁付台付甕・小形丸底壺等が多く出土しており、布留系・東海西武系・吉ヶ谷式系などの外来形土器が主体となって検出されている。古墳時代中期の遺構としては、平成24年度調査区のSD33(33号溝)が中期まで存続することが認められているが、それ以外の遺構は存在しない。古墳前期・後期と比較して中期が少ないのがこの地域の特色であろうか。後期の遺構としては、平成21年度調査区及び平成24年度調査区から溝7条が検出されている。いずれの溝も遺物は出土していないが、覆土中にFA洪水起源の微砂やシルトが堆積していることから、掘削されたのは6世紀初頭以前であると考えられる。

中世の遺構としては、平成121年度調査区と25年度調査区で検出された溝11条と井戸9基、平成21年度調査区

で検出された礎石建物1棟・掘立柱建物2棟・土坑3基があげられる。特に21年度調査区のSD13(13号溝)からは、13世紀後半から14世紀初頭に作られた軒平瓦・軒丸瓦・丸瓦が出土しており、加えて15世紀代の内耳鍋が出土していることから、その廃絶時期を15世紀以降とみることができる。更に平成22年度調査区から平成25年度調査区にかけて検出された、区画溝と考えられる6条の溝や、軒瓦を含む大量の瓦類・軟質陶器・火鉢などを出土した溝3条と、井戸3基及び建物跡は中世寺院の関連遺構であると考えられている。また板碑や五輪塔・銅銭なども検出されていることから、中世墓の存在も考慮する必要がある。

近世の遺構としては、22年度調査区で検出された溝・井戸・土坑があげられるが、これらのうちSK40・44(40・45号土坑)は永楽通寶を中心とする銭が6枚出土していることから、土墳墓である可能性も考えられる。

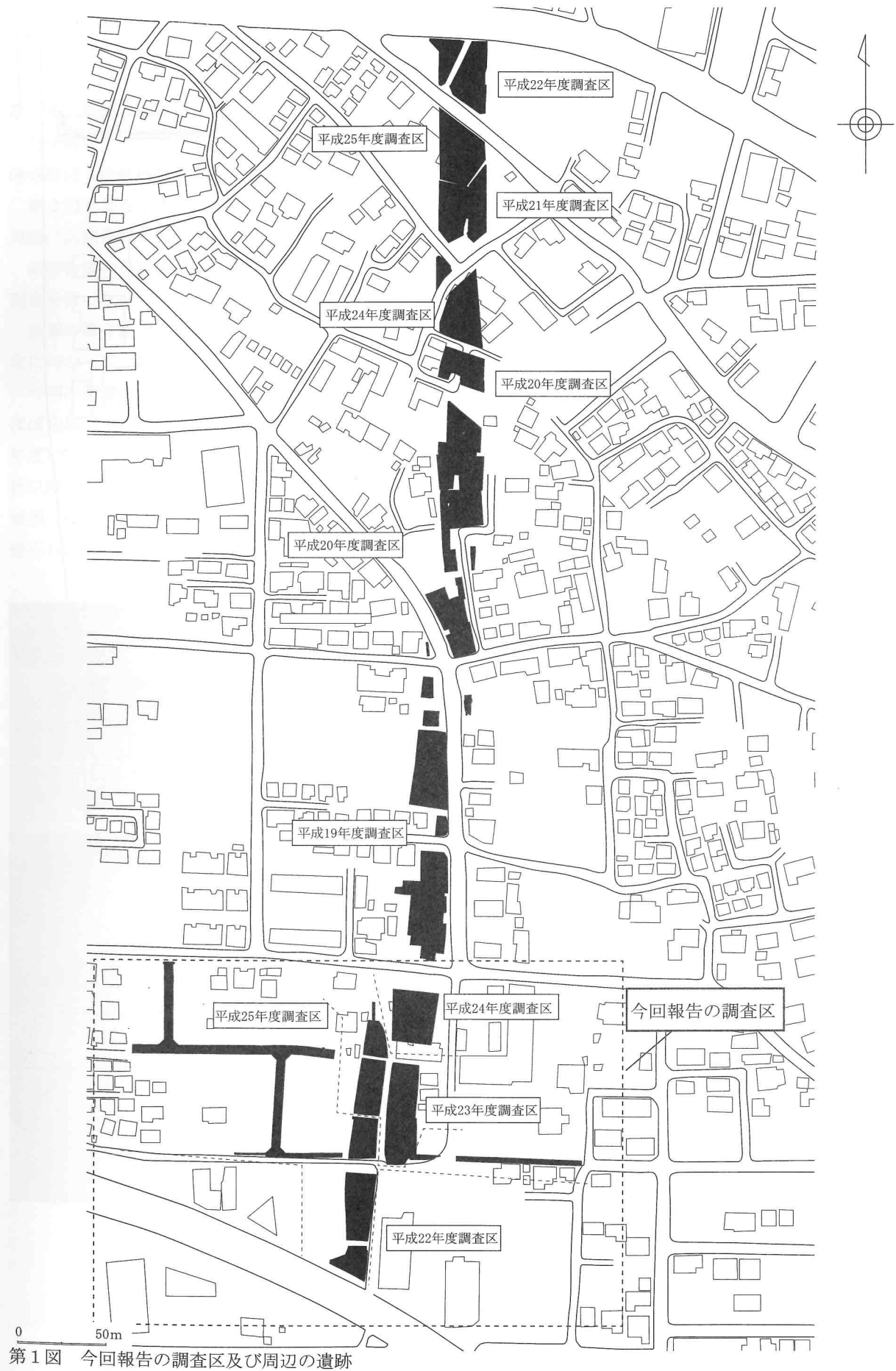
このように見てくると、各年度の高前幹線建設予定地の発掘調査結果から、遺跡の成り立ち・分布について、次のような傾向が伺えることが判明した。

まず、As-B下水田は国道17号から競馬場通りまでの間のおよそ半分より南に集中していることがわかった。特にAs-Bの堆積状況は南の方が厚く残存しており、北へ向かって薄くなっていく傾向がある。これは降灰の量が異なったからではなく、調査区が扇状地上にあるため北へ行くほど地形が高くなっているからで、低湿地から微高地となるためその後の開発によって削平された結果であろう。また同様のことが遺跡の在り方にも表れており、As-B下水田が殆ど確認できなくなるのと同時に中・近世の溝(堀)や井戸などの分布が多くなっている。

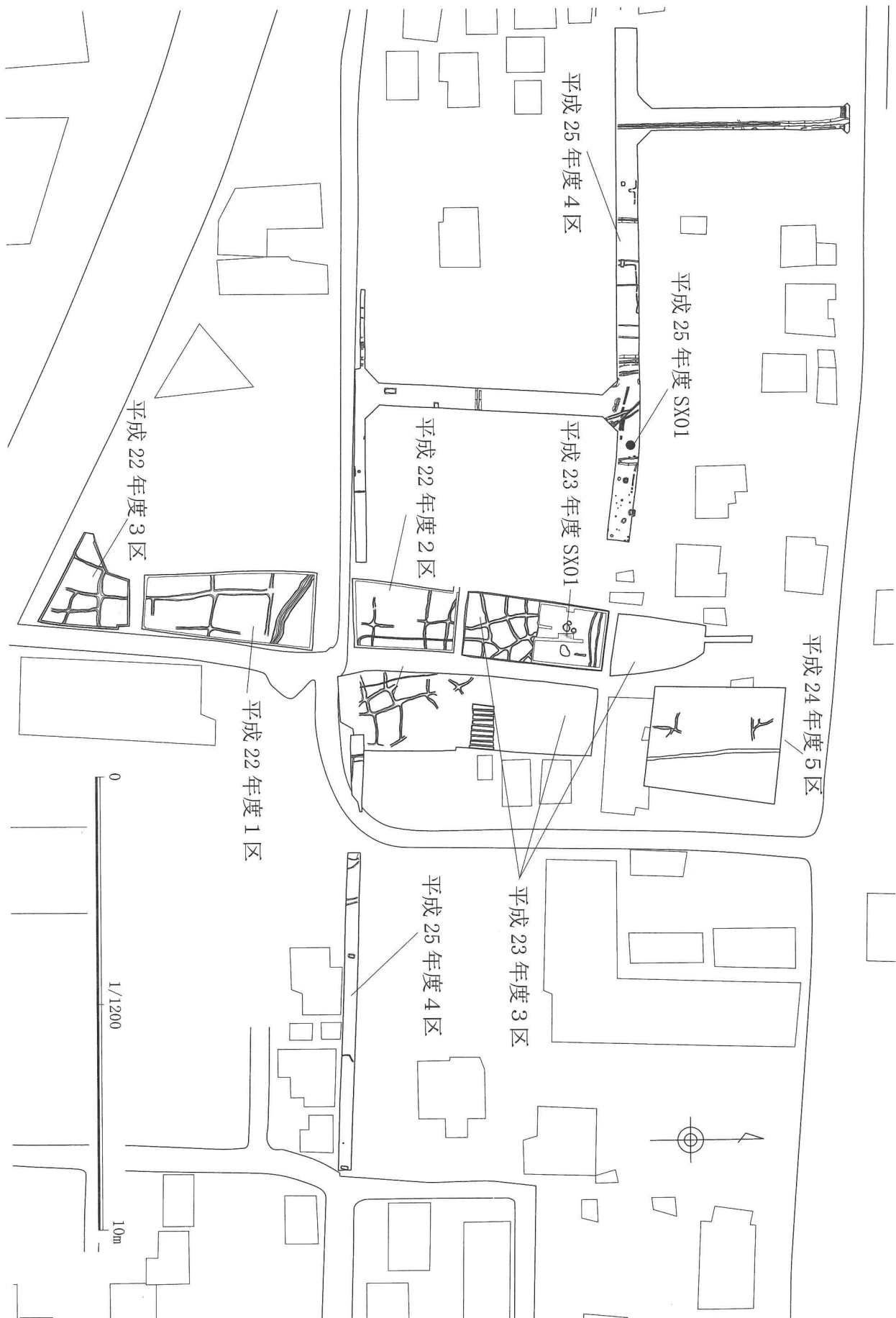
すなわち高前幹線建設予定地の南半は古代の水田用地として、北半は中・近世の屋敷地として活用されていたことが伺えるのである。



平成20年度調査で検出された木組の井戸



第1図 今回報告の調査区及び周辺の遺跡



第2図 平成22年度～25年度調査区(S = 1/1200)

第3章 検出された遺構

第1節 概要

今回報告するのは、高前幹線建設予定地の下之城町以南の部分とそれに付帯する高崎都市計画事業高崎操車場跡地周辺土地区画整理事業の区画道路のうち国道17号線よりも北の地域に存在する遺跡である。

第2図を見るとその全体像が把握できるが、調査区の中心に南北方向の高前幹線予定地が存在しており、その周囲に区画道路が東西南北に走っている。

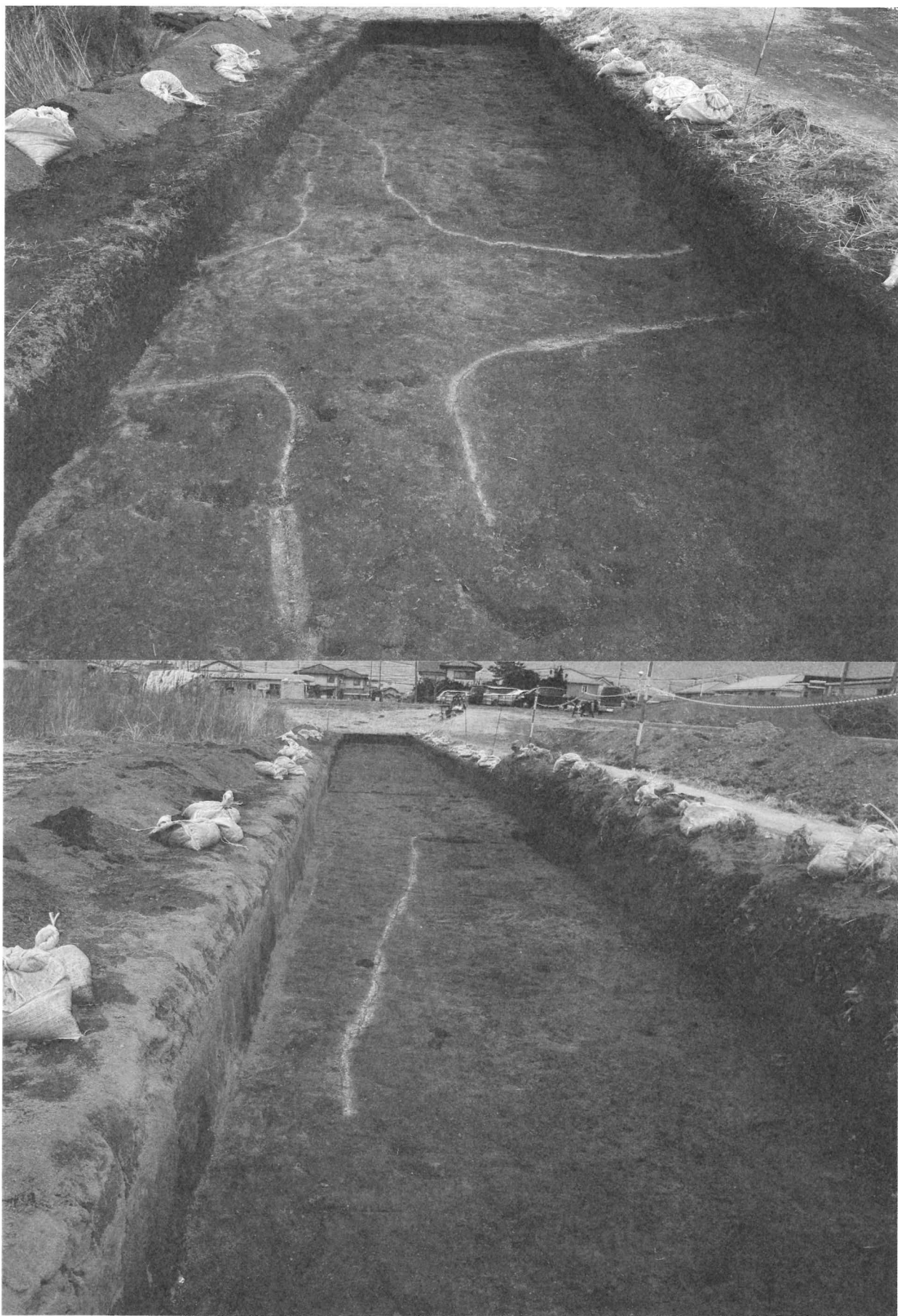
高前幹線の発掘調査は平成22年度から24年度まで連続して行われ、25年度にはその東西に連続する区画道路の調査を行った。

前章の第3節で述べた通り、平成19年度から25年度まで行われた高前幹線建設予定地の発掘調査では、南から北に向かって、水田から中・近世遺構へと遺跡の分布に変化があることがわかった。

今回の発表する地区でも、高前幹線予定地の調査(平成22～24年度)においては、As-B層が全面に分布しており、ほぼ全域で水田の畦を検出することができた。しかし、その東西に展開する区画道路予定地の発掘調査(平成25年度)では、As-Bはごく薄く堆積しているか、全く堆積が認められない地点も多く、火山灰降下後に行われた中世以降の削平によって、消失してしまった可能性が高い。従って水田に伴う畦もほとんど認められず、極めて小規模に確認できただけであった。また、この地区には天明三年(1783年)に浅間山が噴火した際に降下した浅間A軽石(以後As-Aと表記)を覆土に含む近世の南北方向の溝が多く存在していることも特色の一つである。



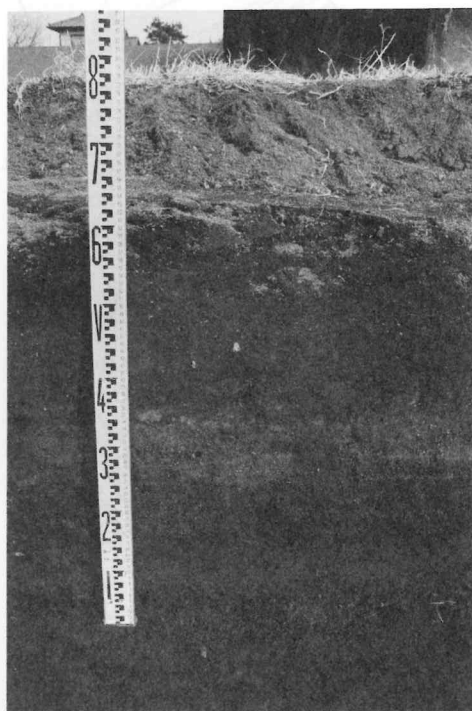
25年度調査で検出されたAs-Aを覆土に持つ南北方向の溝(北から)



上下写真とも25年度調査で検出されたAs-B下水田の畦

第2節 各時代の遺構・遺物

検出された遺構を調査年度ごとに追っていきたい。



調査区の土層断面(最下層がAs-B)

平成22年度には、国道17号線の北に接する高前幹線予定地の調査を行った。現地表面よりおよそ70cm下からAs-Bが検出され、ほぼ調査区全域に分布している。As-Bの厚さは約5cmである。

南北に3地点並ぶ調査区のうち中央の区画には、遺跡の中心を縦断するように、やや幅の広い畦が築かれている。主軸方位はほぼ南北方向で、これに東西方向の畦が取り付くように配置されている。

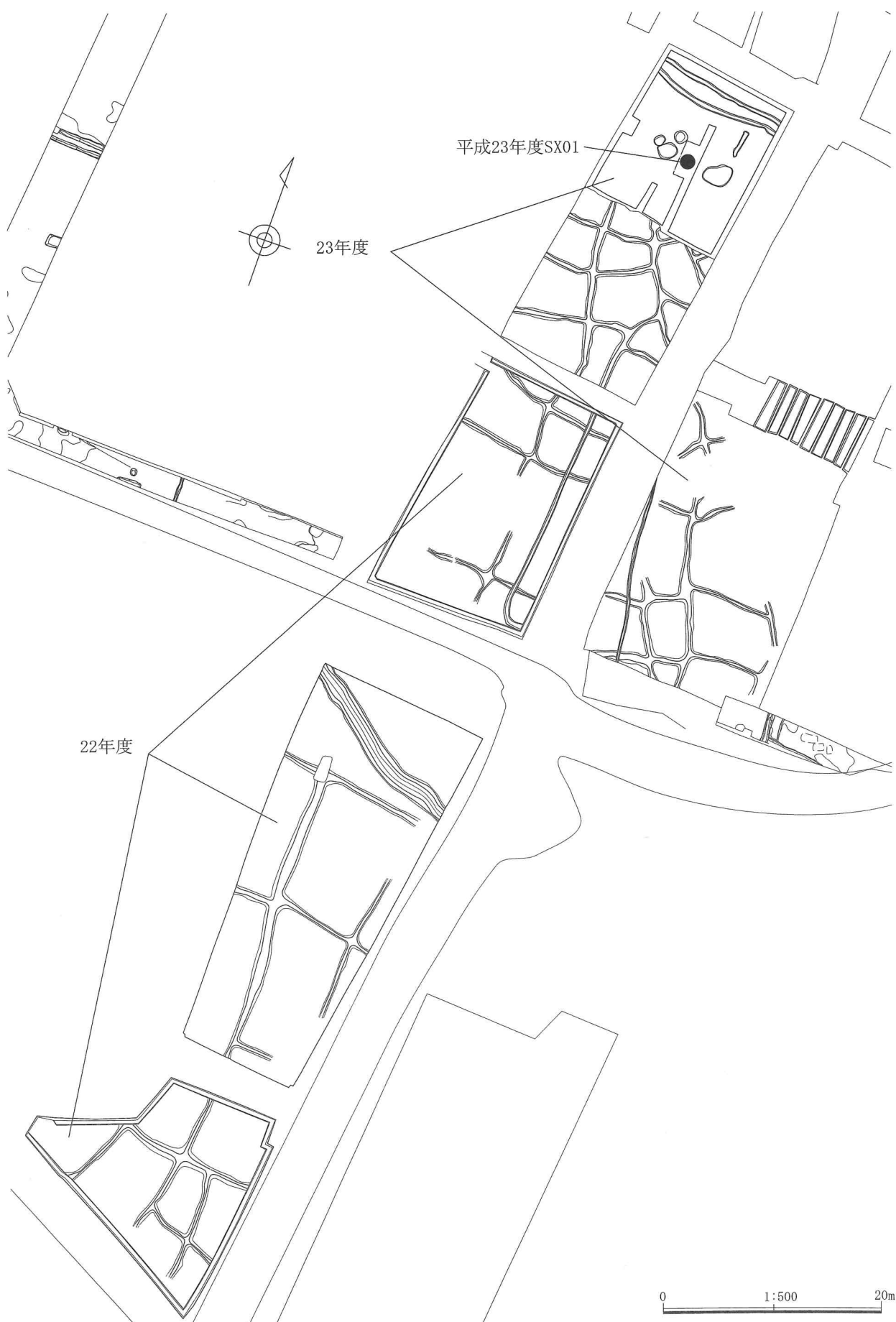
また国道17号線沿いの南端の調査区には、東西方向の畦で、他と比較してやや幅の広いものが存在している。北の区域で見られた南北畦と同様に、大畔ほど幅の広い畦ではないが、水田区画の基準となる畦であろうか。

北の区画には南の区画と異なり、畦配置の基準となり得るような幅の広い畦は存在しない。平面全体像を見ても、畦で区画された水田面積が、南の区画と比較するとやや狭いように感じられる。土地の微隆起に合わせて、水田の形状を細かく変えているのであろう。

中央の区画の北端で、北の区画と接する部分に、東西・南北方向の畦が見られなくなる空白地帯があり、ここに南と北の畦の方位を斜めに横切るように溝が存在しており、溝の両脇には畦状の高まりが見られる。



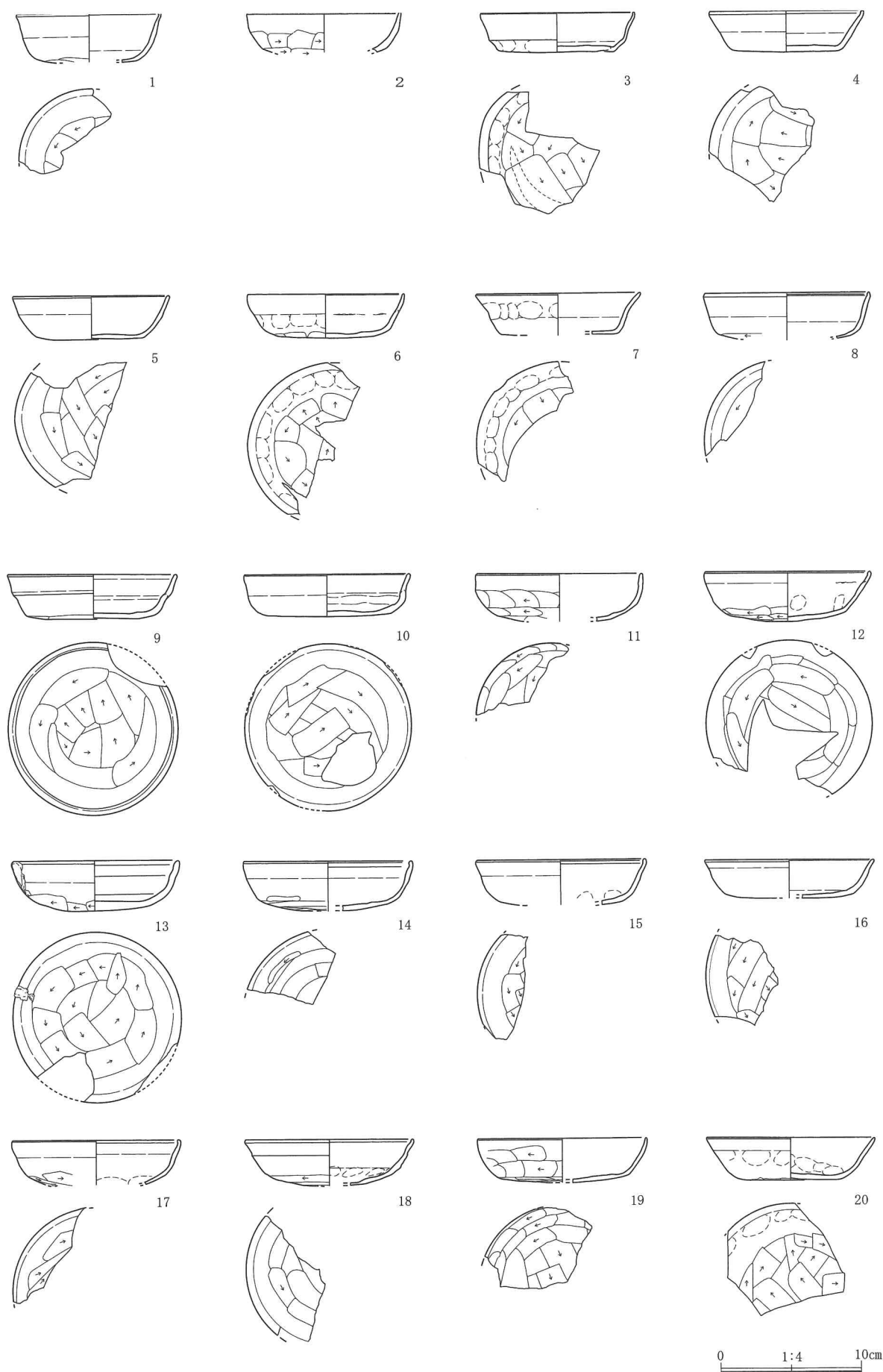
22年度調査区の水路(北西より)



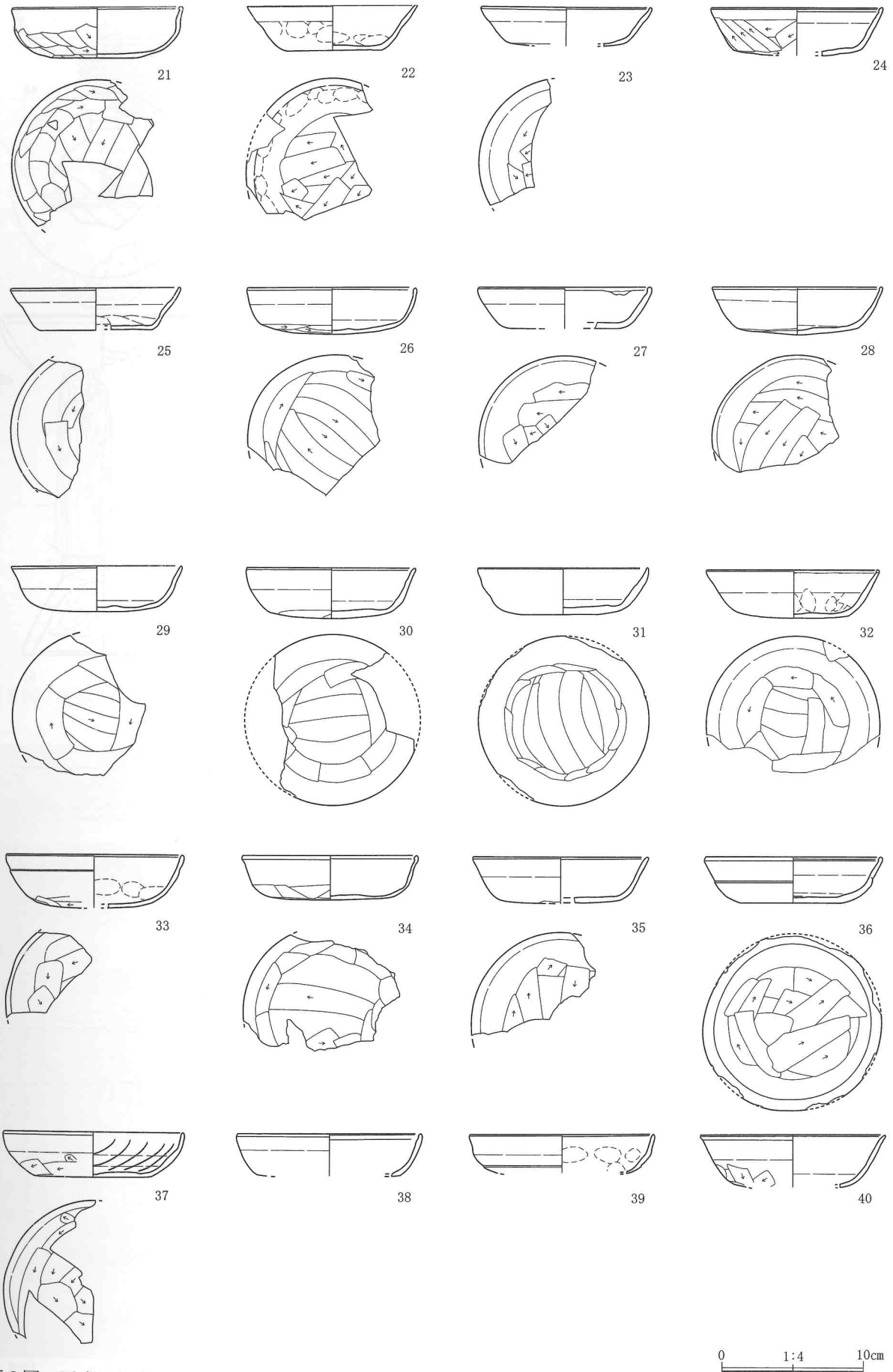
第3図 平成22・23年度As-B下水田平面図(S=1/500)



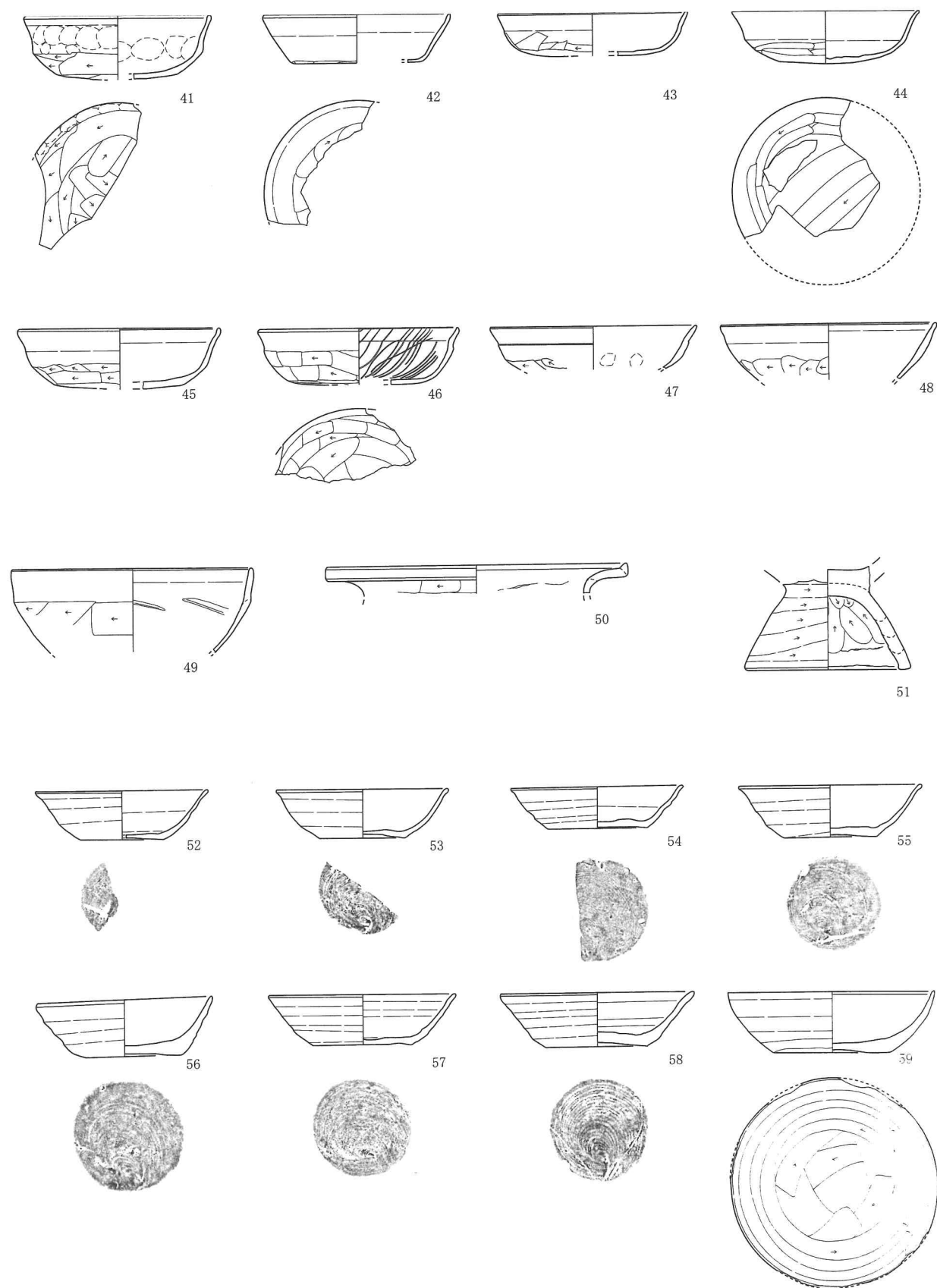
第4図 平成23年度SX01(S=1/ 40)



第5図 平成23年度SX01出土遺物① (S=1/4)

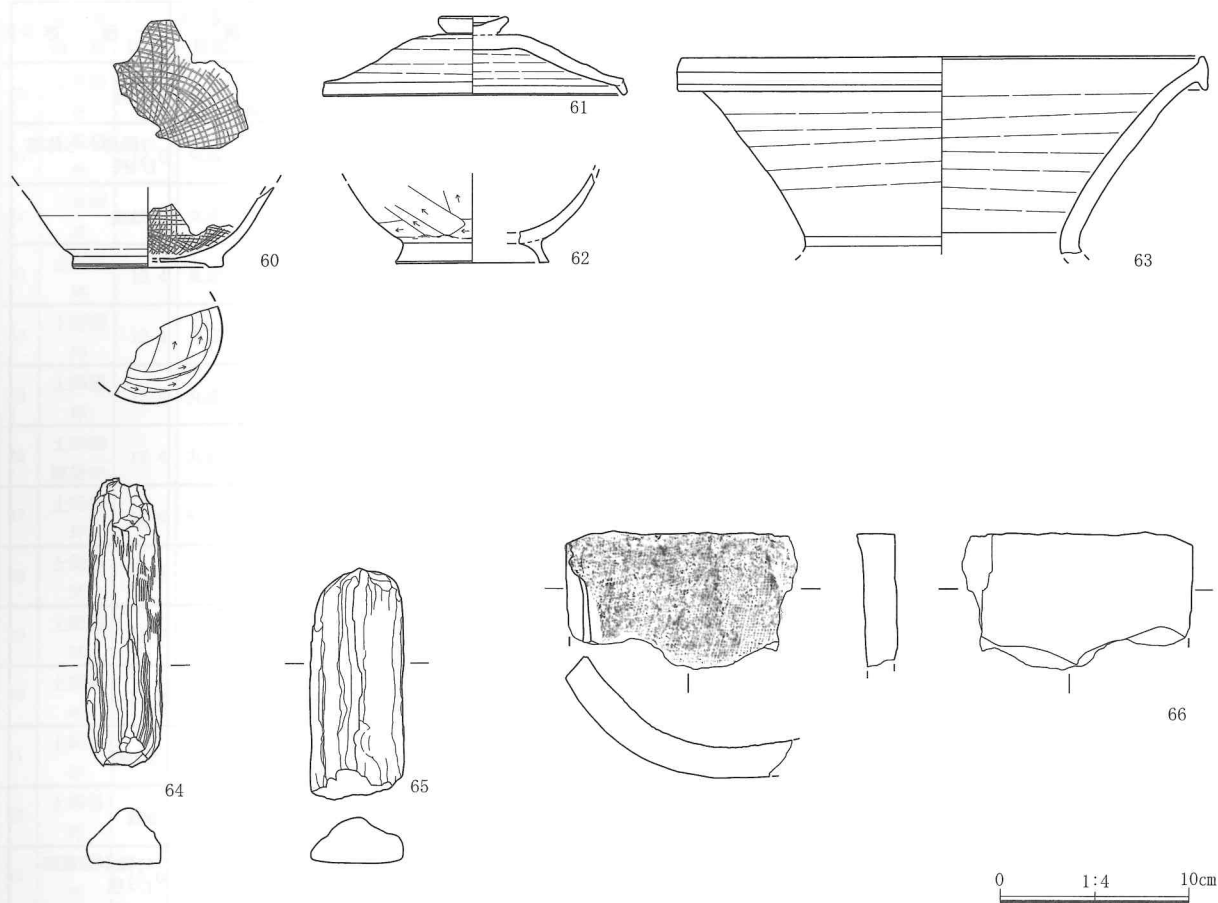


第6図 平成23年度SX01出土遺物② (S=1/4)



第7図 平成23年度SX01出土遺物③ (S=1/4)

0 1:4 10cm



第8図 平成23年度SX01出土遺物④ (S=1/4)



平成23年度SX01遺物出土状況

番号	器種別	法量(cm)			形態 外面調整・内面調整	色調	残存
		口径	底径	器高			
1	土師器 杯	10.0	7.2	3.5	外：ロ-ヨコナデ 底-ヘラケズリ 内：ロ-ヨコナデ 体-ナデ	5YR6/4 にぶい赤褐	1/6残
2	土師器 杯	10.8	—	2.8残	外：ロ-ヨコナデ 底-ヘラケズリ 内：ロ-ヨコナデ 体-ナデ	5YR6/6 橙	口縁部から体部 1/4残
3	土師器 杯	10.8	8.0	2.8		5YR6/4 にぶい橙	1/3残
4	土師器 杯	11.0	7.7	2.9		5YR6/6 橙	
5	土師器 杯	11.0	丸底	3.1	外：ロ-ヨコナデ 底-ヘラケズリ 内：体-ナデ後 ロ-ヨコナデ	5YR6/4 にぶい橙	
6	土師器 杯	11.3	7.5	3.1		7.5YR6/4 にぶい橙	
7	土師器 杯	11.4	8.2	2.9	外：ロ-ヨコナデ 底-ヘラケズリ 内：体-ナデ	5YR6/4 にぶい橙	
8	土師器 杯	11.6	9.4	3.1		5YR6/4 にぶい橙	
9	土師器 杯	11.6	8.7	3.2		7.5YR6/4 にぶい橙	
10	土師器 杯	11.6	丸底	3.0		5YR6/3 にぶい橙	
11	土師器 杯	11.8	丸底	3.6		10RY6/8 明褐色	
12	土師器 杯	11.8	丸底	3.6	外：ロ-ヨコナデ底-ヘラケズリ 内：ロ~底-立ち上がりヨコナデ 底-ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	2/3残
13	土師器 杯	11.8	5.0	3.6		7.5YR7/4 にぶい橙	90%
14	土師器 杯	12.0	丸底	3.0		7.5YR7/2 明褐灰	口縁から底部 1/4残
15	土師器 杯	12.0	丸底	3.1		7.5YR7/3 にぶい橙	口縁部から体部 1/5残
16	土師器 杯	12.0	丸底	2.7残	外：ロ-ヨコナデ底-ヘラケズリ 内：ロ~体-ヨコナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	口縁から底部 1/8残
17	土師器 杯	12.0	丸底	3.2残	外：ロ-ヨコナデ 体-ヘラケズリ 内：ロ-ヨコナデ 体-ナデ 指頭痕あり	5YR6/4 にぶい橙	口縁部1/4弱残
18	土師器 杯	12.0	丸底	3.3		7.5YR7/4 にぶい橙	1/4残
19	土師器 杯	12.0	8.5	3.1		7.5YR6/4 にぶい橙	1/4残
20	土師器 杯	12.0	丸底	3.0	外：ロ-ヨコナデ 底-ヘラケズリ 内：ロ-ヨコナデ 体-ナデ	5YR7/4 にぶい橙	口縁部1/8残
21	土師器 杯	12.0	6.0	3.6		5YR6/4 にぶい橙	1/2残
22	土師器 杯	12.0	丸底	3.2	外：ロ-ヨコナデ 底-ヘラケズリ 内：ナデ	2.5YR6/ 4にぶい橙	1/3残
23	土師器 杯	12.0	丸底	2.8	外：ロ-ヨコナデ 底-ヘラケズリ 内：ロ-ヨコナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	口縁部1/4残
24	土師器 杯	12.0	丸底	3.4		7.5YR7/4 にぶい橙	1/4残
25	土師器 杯	12.0	7.8	3.0		5YR6/6 橙	1/4残
26	土師器 杯	12.0	丸底	3.3		5YR7/4 にぶい橙	1/3残
27	土師器 杯	12.0	丸底	2.9	外：ロ-ヨコナデ 底-ヘラケズリ 内：ロ-ヨコナデ 底-ヘラケズリ	7.5YR7/4 にぶい橙	1/4残
28	土師器 杯	12.0	8.6	3.4	外：ロ-ヨコナデ 底-ヘラケズリ 内：ロ-ヨコナデ	10RY7/4 にぶい黄橙	1/4残
29	土師器 杯	12.0	丸底	3.2		5YR6/4 にぶい橙	40%

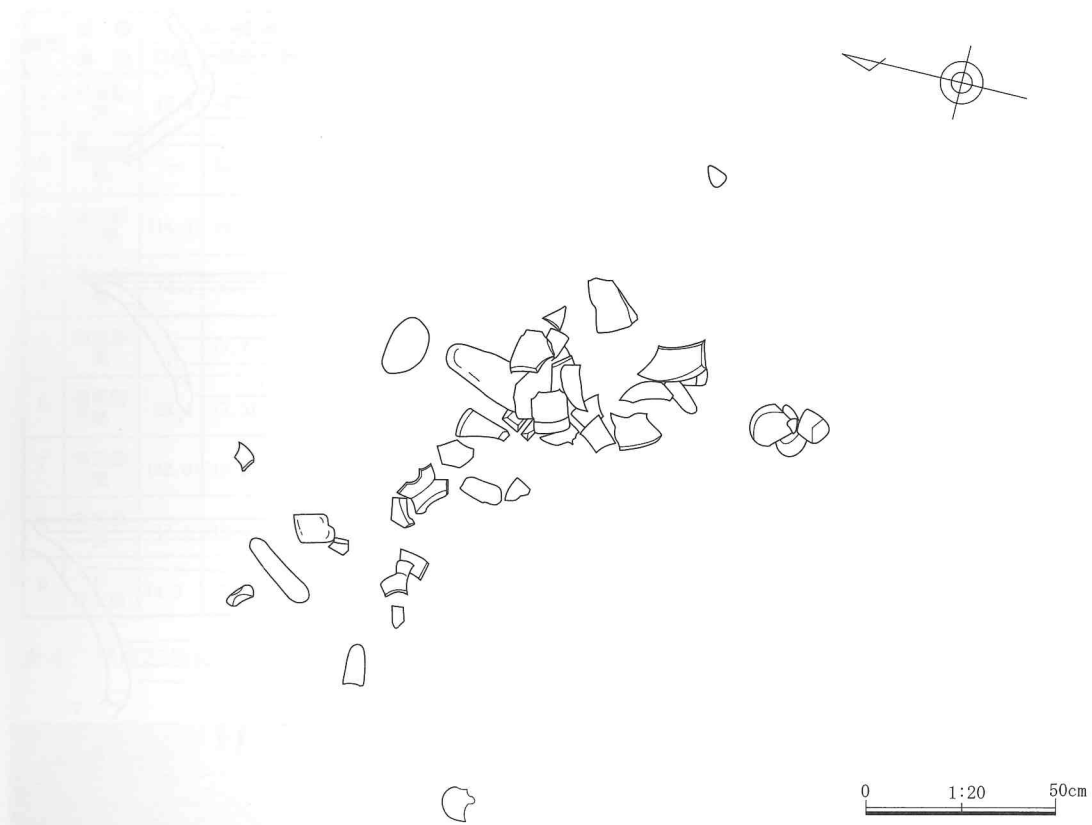
表1 平成23年度SX01出土遺物①

番号	器 種 種 別	法 量 (cm)			形 態 外面調整・内面調整	色 調	残 存
		口径	底径	器高			
30	土師器 杯	12.0	丸底	3.5		5YR6/6 橙	60%
31	土師器 杯	12.0	丸底	3.2		7.5YR7/4 にぶい橙	99%
32	土師器 杯	12.0	丸底	3.4		7.5YR6/4 にぶい橙	
33	土師器 杯	12.4	丸底	3.8		7.5YR7/4 にぶい橙	口縁部1/5弱残
34	土師器 杯	12.4	丸底	3.1		5YR6/6 橙	1/2残
35	土師器 杯	12.4	丸底	3.3	外：ロ-ヨコナデ 底-ヘラケズリ 内：ロ-ヨコナデ	7.5YR5/6 明褐	1/4残
36	土師器 模倣杯	12.4	丸底	3.3		5YR6/4 にぶい橙	
37	土師器 杯	12.6	8.0	3.2		7.5YR7/2 明褐灰	1/4残
38	土師器 杯	12.8	—	3.0		5YR6/4 にぶい橙	口縁から体部 1/4残
39	土師器 杯	13.0	丸底	3.7残	外：ロ-ヨコナデ 底-ヘラケズリ 内：ロ-ヨコナデ 底-ヘラケズリ、指頭痕あり	5YR6/4 にぶい橙	口縁部1/4弱残
40	土師器 杯	13.0	—	3.7		7.5YR6/6 橙	
41	土師器 杯	13.0	丸底	4.5残	外：ロ-ヨコナデ 底-ヘラケズリ 内：ロ-底-立ち上がりヨコナデ	7.5YR7/3 にぶい橙	1/4残
42	土師器 杯	13.0	9.0	3.4	底ナデ	7.5YR5/4 にぶい橙	1/8残
43	土師器 杯	13.0	丸底	3.0	外：ロ-ヨコナデ 底-ヘラケズリ 内：ロ-ヨコナデ 底-ナデ	5YR6/4 にぶい橙	1/4残
44	土師器 杯	13.0	丸底	3.7		5YR5/4 にぶい赤褐	1/3残
45	土師器 杯	13.8	丸底	4.2		5YR6/6 橙	1/4残
46	土師器 杯	14.0	丸底	4.0	外：ロ-ヨコナデ 底-ヘラケズリ 内：ロ-ヨコナデ 底-ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	1/4残
47	土師器 杯	14.2	—	3.0残	外：ロ-ヨコナデ 体-ヘラケズリ 内：ロ-体-ヨコナデ	5YR6/4 にぶい橙	口縁部から体部 1/6残
48	土師器 杯	15.0	—	3.9		7.5YR6/3 にぶい橙	口縁から胴部 1/4残
49	土師器 鉢	16.4	—	5.8残	外：ロ-ヨコナデ 体-ヘラケズリ 内：ロ-ヨコナデ 体-ヘラケズリ ヘラ痕あり	10YR7/3	口縁部1/5残
50	土師器 甕	21.0	—	2.0		にぶい黄橙 N4/	口縁部破片
51	土師器 台付甕	—	11.0	7.0残	内：ナデはらせん状 側面には中心に向かって指の痕があり さらに中心を整えた痕がある	灰 N4/	台部2/3残
52	須恵器 杯	12.0	5.7	4.5	轆轤調整 回転糸切り	灰 7.5YR7/3	1/8残
53	須恵器 杯	12.0	6.0	3.5	轆轤調整 回転糸切り	にぶい橙 N7/	
54	須恵器 杯	12.0	7.0	2.9	轆轤調整 回転糸切り	灰白 2.5YR6/1	
55	須恵器 杯	12.0	6.4	3.6	轆轤調整 回転糸切り	黄灰 10YR7/1	
56	須恵器 杯	12.2	7.3	4.2	轆轤調整 回転糸切り	灰白 5YR7/6	
57	須恵器 杯	12.8	7.0	3.5	轆轤調整 回転糸切り	橙 外面10YR7/4	97%
58	須恵器 杯	13.4	7.0	3.8	轆轤調整 回転糸切り	にぶい黄橙 内面10YR2/1	口縁部1/16 底部のみ完形

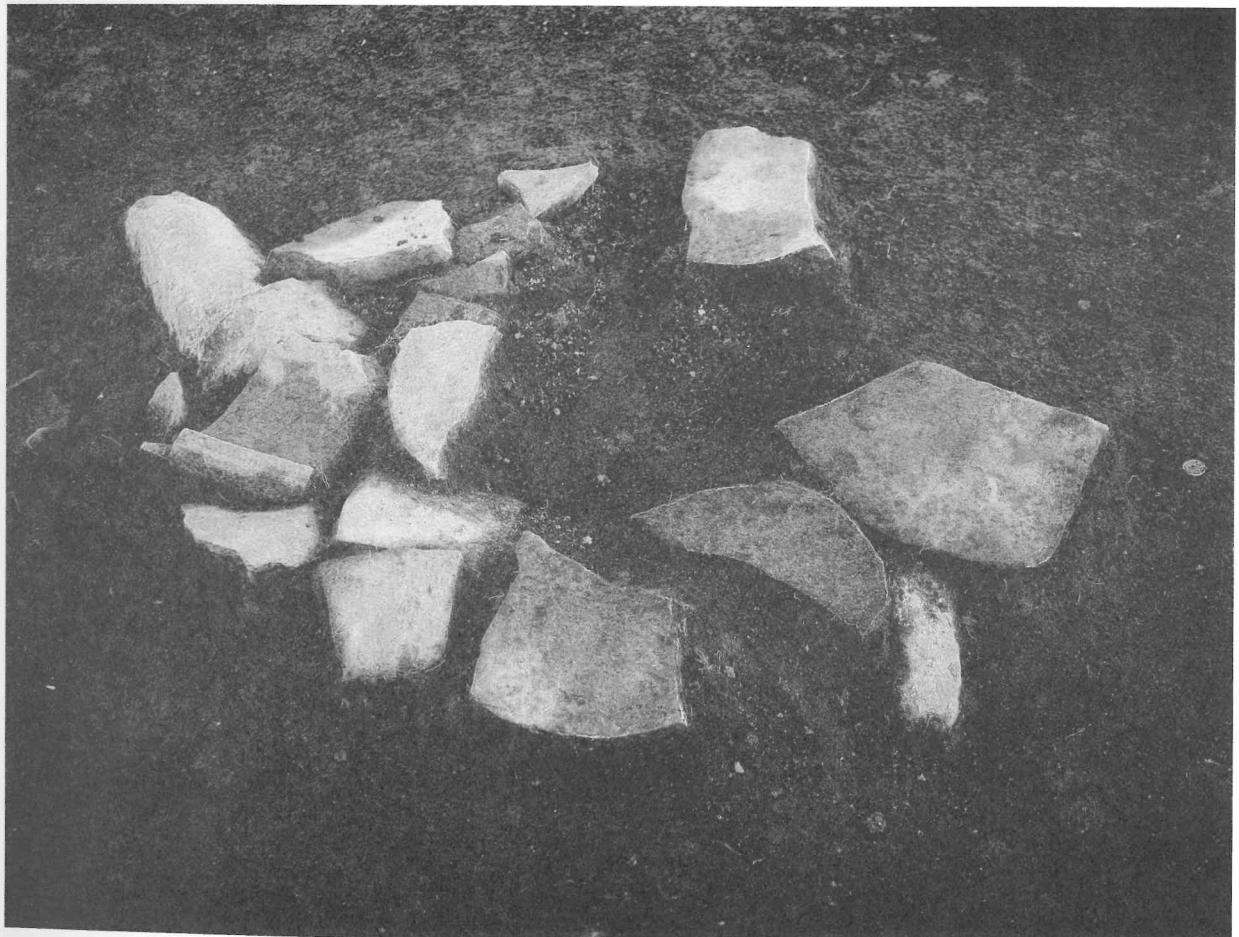
表2 平成23年度SX01出土遺物②

番号	器種 種別	法量(cm)			形態 外面調整・内面調整	色調	残存
		口径	底径	器高			
59	須恵器 坏	14.4	8.0	4.2	酸化炎焼成	黒 10YR7/1	97%
60	須恵器 碗	—	7.8	4.3		明赤灰 N4/ 灰	
61	須恵器 蓋	15.8	8.1	4.2		10YR7/1 灰白	
62	須恵器 壺	—	—	4.7残	外：胴へラケズリ 高台ヨコナデ 内：胴ナデ	7.5Y6/1 灰	貼付け高台部 1/4残
63	須恵器 甕	27.5		10.3残		7.5GY6/1 緑灰	口縁部1/6残
64	緑泥 片岩					内：2.5Y7/1 灰白 外：N3/1 暗灰	長さ15.4cm 幅3.9cm 高さ3.0cm
65	緑泥 片岩						長さ12.0cm 幅4.8cm 高さ2.4cm
66	瓦 平瓦				内面に布目あり		縦5.0cm 横12.0cm 厚さ1.5cmの破片

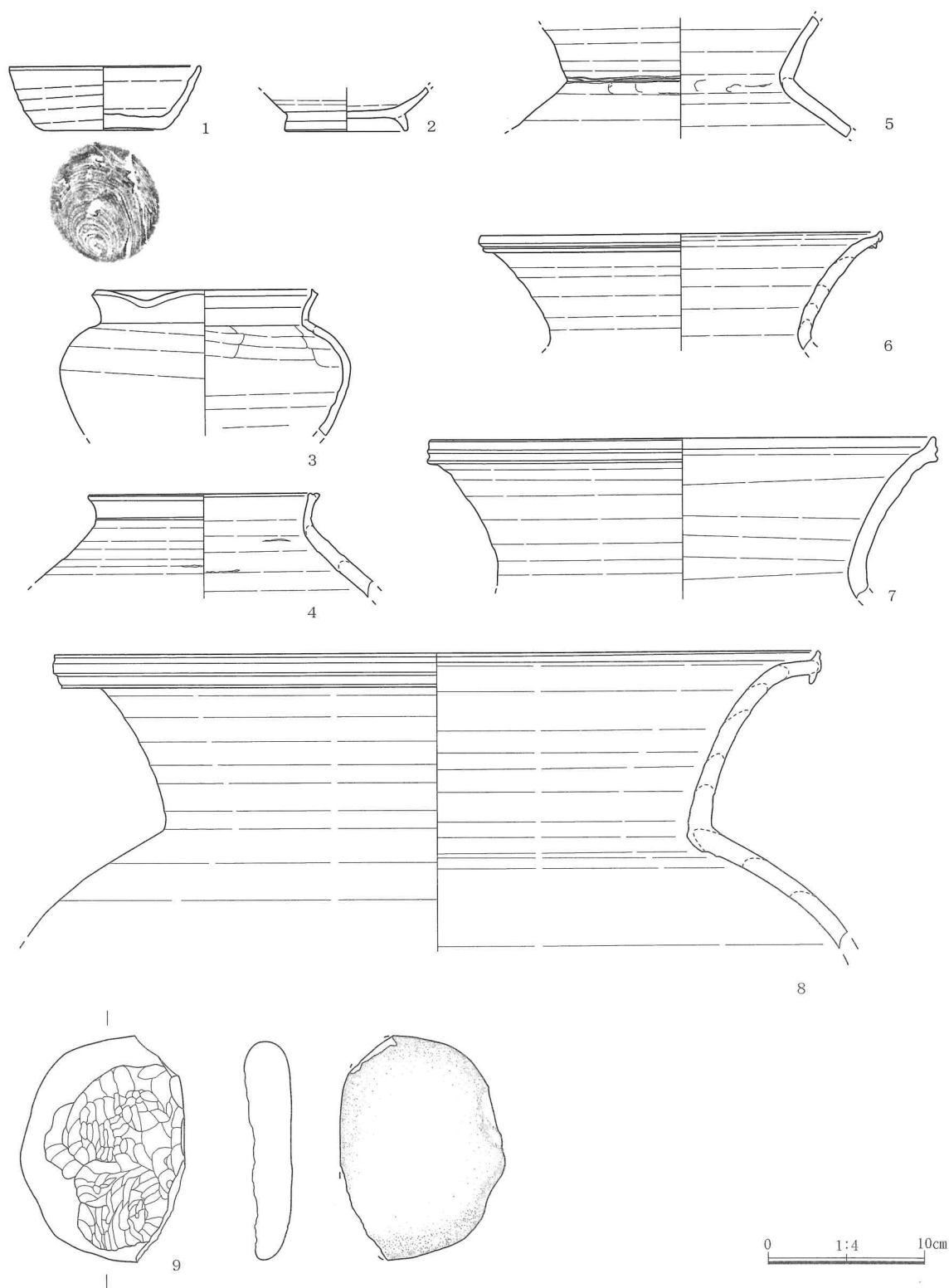
表 3 平成23年度SX01出土遺物③



第9図 平成25年度SX01 (S=1/20)



平成25年度SX01遺物検出状況



第10図 平成25年度SX01出土遺物 (S=1/4)

番号	器種別	法量(cm)			形態 外面調整・内面調整	色調	残存
		口径	底径	器高			
1	須恵器 坏	11.8	4.1	7.4	轆轤調整 底部回転糸切り無調整	5RP6/1 紫灰	口~1/3欠 体部~底部あり
2	須恵器 碗	—	(2.5)	(7.4)	轆轤調整 貼り付け高台	10YR7/3 にぶい黄橙	底部高台のみ 2/3残
3	須恵器 小甕	(14.4)	(9.3)	—	轆轤調整	7.5Y5/1 灰	
4	須恵器 甕	14.6	(6.7)	—	轆轤調整	N7 灰白	口縁~肩部 1/3
5	須恵器 甕	—	(7.7)	—	轆轤調整	7.5YR6/1 褐灰	頸部1/4残
6	須恵器 甕	25.4	(7.3)	—	轆轤調整	N4 灰	口縁1/8残
7	須恵器 甕	(32.0)	(10.2)	—	轆轤調整	10YR7/3 にぶい黄橙	口縁1/4残
8	須恵器 甕	47.4	(18.5)	—	轆轤調整	5PB5/1 青灰	口縁~肩部 全体の1/10
9	石 加工痕	14.3	10.5	3.5	片面に削ったような加工痕があるが、用途は不明	10YR6	

表4 平成25年度SX01出土遺物



平成25年度SX01遺物検出状況

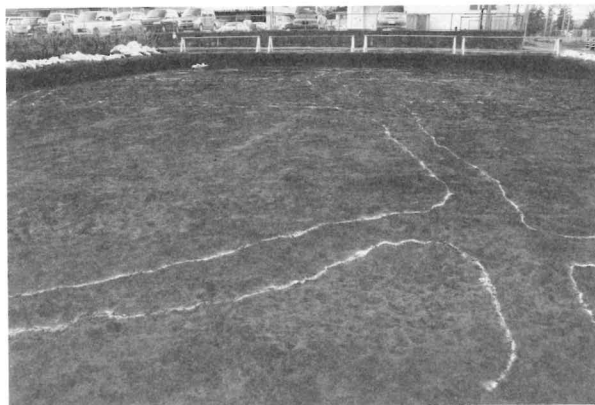
遺跡が存在する地形は、北から南に向かって緩やかに傾いているため、北の水田区画から南の水田区画へ導水するための水路であろうか。溝は22年度中央の区画の北西端で調査区外へ出てしまうが、残念なことに25年度調査区からこの溝の続きを検出することができなかった。従って、北の水田から溝への給水状況は確認されていない。

平成23年度には、平成22年度調査区の北端から北へ連続する南北2地点の調査区と、更にその東隣の調査区を発掘した。以降23年度西調査区と東調査区として扱いたい。

東西両調査区ともAs-Bが検出され、水田に伴う畦が検出されたが、双方とも調査区の北半部においてAs-Bが検出できなくなった。東調査区はAs-Bの堆積が薄く、畦の検出は不明瞭である。また、西調査区南側の北半とそれに連続する西調査区北側においては、As-Bが検出されていない。(第2図参照)

東調査区で検出された南北方向の畦は、西調査区及び22年度調査区の畦の主軸方位と若干ながら傾きを変えており、それに合わせて東西方向の畦の方位も異なっている。また、西調査区の畦の方位も東調査区のそれとほぼ同様であり、地形の微妙な変化に合わせて水田の方位を変えていったことが伺える。

東調査区の南北中央部分には、長方形の土坑を横並びにしたような形状のAs-A処理坑が存在しており、それより北側ではAs-Bの堆積が認められないか、極少量となっている。ただし、これより北側にAs-B下水田が存在しない訳ではなく、平成23年度東調査区の北に接する平成24年度5区では、不明瞭ながらAs-B下水田の畦を検出しており、更に北に連続する高前幹線平成19年度調査区からは、明瞭な形でAs-B下水田畦が検出されている。また、西調査区北半においてAs-Bが検出されなくなるすぐ南側では畦が途切れたような形で残存しているため、これらAs-B空白地帯の存在理由は、後の時代による削平の結果であろう。



23年度東調査区As-B下水田(西から)



23年度東調査区As-A処理坑

特に23年度調査で注目されるのは、西調査区のSX01である。

西調査区でAs-Bが検出できなくなった北半部分を少しずつ下げていった所、土坑や住居のプランが存在しない水田土壌の中から大量の土師器及び須恵器が検出された。土器の集中地点では、やや大きめの礫がいくつか存在しており、近隣では産出しない緑泥片岩の破片が検出されたが、祭祀遺構を思わせる玉類や焼土の検出は無かった。小片ではあるが、布目痕を残す平瓦片も1点出土している。

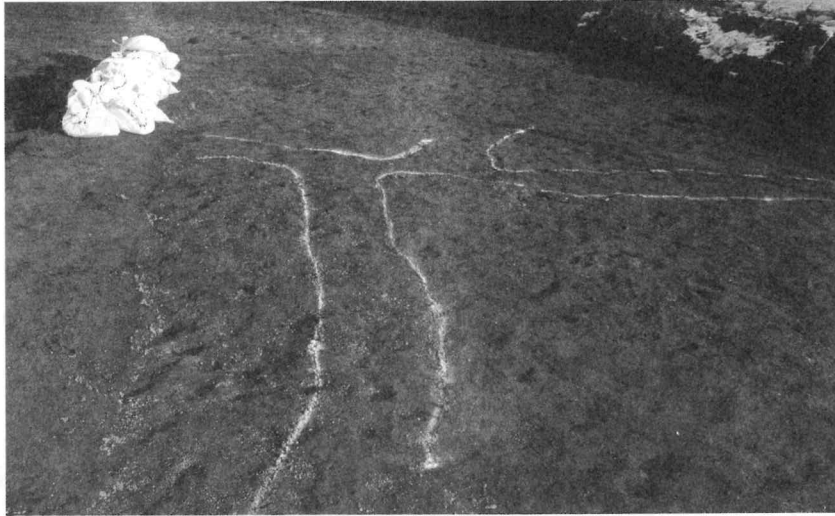
出土した土器の器種構成を見ると、圧倒的に土師器が多く、次いで須恵器が多い。土師器は一部平底気味の形態も見られ、口縁部ヨコナデ、底部外面へラケズリ調整を残しており、僅かではあるが内面に暗文を施しているものも見られる。須恵器は底部外面糸切痕を残しており、底径はやや小型化が進んでいるが、口径の二分の一よりも大きい。一部に焼成時の還元が完全でなく黄灰からにぶい黄橙色を呈する物が存在する。土師器・須恵器の特徴から9世紀前半代の遺物であろうか。



上下とも23年度SX01検出状況

平成24年度は、平成23年度東調査区の北側で調査を行った。As-Bは上面が削平を受けているため残存状態が非常に悪く、残っているところでも非常に薄い堆積であった。

調査区中央やや東寄りに南北方向の溝が1条存在するが、覆土にAs-Aを含んでおりAs-B下水田に伴う遺構ではない。また、この溝より東側ではAs-Bの堆積が見られなかった。おそらく削平によるものであろう。畦は調査区中央北端及び南端で検出されたが、残存状態が非常に悪く調査区内における水田の構造は認識できない。



24年度As-B下水田の畦(西から)

25年度には高前幹線の西と東に展開する区画道路の調査を行った。概要で述べた通り、As-Bは大部分が削平を受けており、水田に伴う畦もあまり確認されていない。また、As-Aを覆土に持つ近世の溝等が多く検出された。



25年度SX01検出状況

これらの遺構の中で、注目されるのは高前幹線より西の調査区で検出されたSX01である。

SX01は23年度のSX01と同様に土坑等の掘りこみを持たずに遺物の破片が多く出土したが、23年度と異なり土師器の坏類を伴わず、須恵器の甕・壺類が主体で、個数はそれほど多くない。甕類に少し古めの様相があるが、9世紀代の遺物であろう。



22年度調査区全景(西から)



22年度3区(南から)



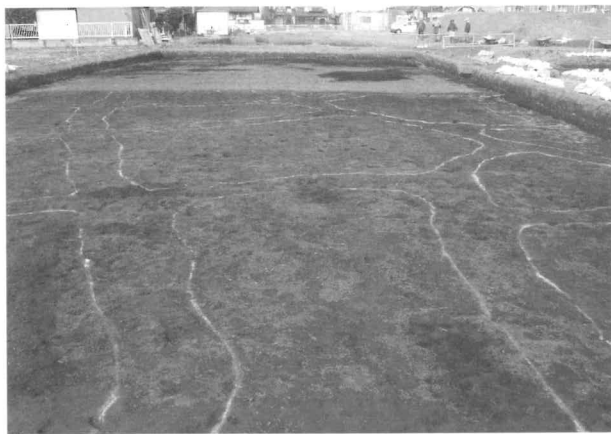
22年度2区(南西から)



22年度1区(南西から)



23年度調査区(北西から)



23年度調査区(南から)



23年度S X 01遺物集中地点①



23年度S X 01遺物集中地点②



24年度調査区(西から)



24年度(西から)



24年度調査区(南から)



25年度調査区(北から)



25年度調査区(南から)



25年度調査区(東から)



25年度調査区(北から)



25年度S X 01遺物集中地点①



25年度S X 01遺物集中地点②



1



2



3



4



5



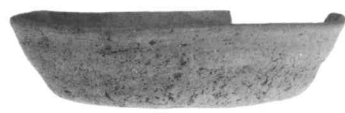
6



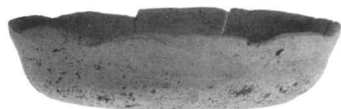
7



8



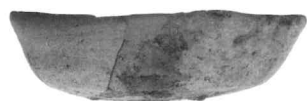
9



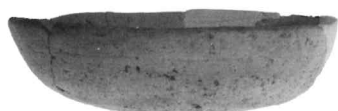
10



11



12



13



14



15



16



17



18



19



20



21



22



23



24



25



26



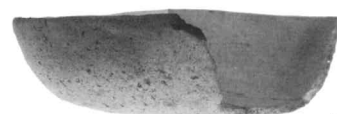
27



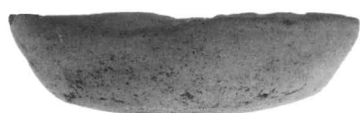
28



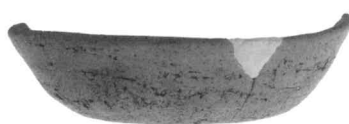
29



30



31



32



33



34



35



36



37



38



39



40



41



42



43



44



45



46



47



48



49



50



51



52



53



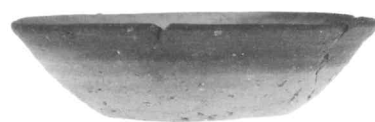
54



55



56



57



58



59



60



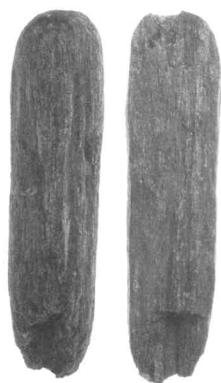
61



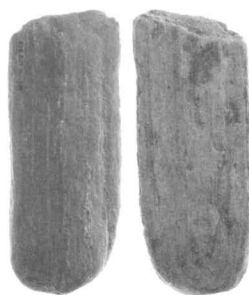
62



63



64



65



66

抄 録

ふりがな	しものじょういせきぐん							
書名	下之城遺跡群 1							
副書名								
巻次								
シリーズ名	高崎市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 370 集							
編著者名	黒田晃							
編集機関	高崎市教育委員会							
編集機関所在地	370-8501 群馬県高崎市高松町 35 番地の 1							
発行年月日	2018 年 3 月 31 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間 2010~2013	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しものじょういせきぐん 下之城遺跡群	ぐんまけんたかさきししものじょうまち 群馬県高崎市下之城町	10202	497 518 548 566	36° 18' 40	139° 2' 1	平成22年度～ 平成25年度		高前幹線及び 区画道路建設

⑤ 2016年3月31日

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
しものじょういせきぐん 下之城遺跡群	集落・畑地	平安・近世	As-B降下以前の土器集中地点・ As-B下水田 近世溝	土師器・ 須恵器	なし

高崎市文化財調査報告書第 370 集

下之城遺跡群 1

印刷・発行 平成 28 年 3 月 31 日

発 行 高崎市教育委員会

〒 370 - 8501

群馬県高崎市高松町 35 番地 1

印 刷 野島印刷株式会社

群馬県高崎市八千代町 4 - 8 - 14

高崎市文化財調査報告書第 370 集

下之城遺跡群 1

印刷・発行 平成 28 年 3 月 31 日

発 行 高崎市教育委員会

〒 370 - 8501

群馬県高崎市高松町 35 番地 1

印 刷 野島印刷株式会社

群馬県高崎市八千代町 4 - 8 - 14